亀山光明著

『釈雲照と戒律の近代』

（法藏館・二〇二二年）

繁田　真爾

仏教にはもともと、嘘をつかない、命あるものを殺さない、夫婦を持たないなど、大小様々な戒律が存在する。いわゆる三学（戒・定・慧）の第一として、仏教徒の教えや生活倫理の根本にそれは位置づけられてきた。しかし一八七二年の有名な太政官布告（いわゆる肉食妻帯令）以降、近代日本の仏教は「破戒」や「戒律軽視」が一般化し、やがてそれが「日本仏教」の特長であるかのように語られてきた。だが近代日本の仏教は、本当に「戒律」を失ったのだろうか。

本書では、近代日本仏教をめぐるこうした語りや通念が明確に否定される。戒律実践は、近代日本でもさまざまなかたちに姿を変えながら展開していったというのが、著者の主張なのである。それでは、「戒律の近代」とは具体的に何であったのか。本書は、真言宗の僧侶で「近代仏教史を代表する持戒僧」、そして「戒律復興運動の最後の担い手」として知られる釈雲照（一八二七―一九〇九）を主人公に、この課題に正面から取り組んだ新進気鋭の宗教学者による著作である。以下、各章の概要を紹介した上で、コメントと論評を試みたい。

＊

「序」ではまず、本書が「言説研究」の立場によることが明言される。つまり、従来「日本仏教」の特徴として本質主義的に語られてきた「戒律軽視」は、実は「近代に産み出された一つの構築物」とみるべきで、むしろ問われるべきは、「破戒」が日本仏教の本質とみなされていく言説の系譜そのものだという。その上で、これまでの日本近代仏教研究を規定してきた「真宗中心史観」（碧海寿広）の問い直し、および宗教研究において広く受け入れられてきた「ビリーフ／プラクティス」の単純な二元的分析概念によって描かれてきた物語の再考を目指すことが、本書の中心的な課題として提示される。

第一章「戒律主義と「国民道徳」論――宗門改革期の釈雲照」では、「戒律」が「宗教」とは異なる次元、とりわけ当時の「国民道徳」論との関連で主張されるようになる過程が注目される。雲照は一貫して国家による仏教の庇護や僧風刷新を理想としながら、現実の政治過程を前に、政教分離を容認していく。だが政治と宗教を完全には断絶させず、その紐帯として雲照が見出したのが「道徳」であった。著者は、雲照が一八八〇年代を中心に試みたこのような「国民道徳」の模索は、単なる宗教的実践を超えて仏教の戒が提唱されたという意味で、「戒律言説形成の揺籃」として注目すべきだという。そして「宗

教」という枠組みを可能な限り尊重しつつ、「国民道徳」との関係において「戒律」を語りなおしたことこそが、雲照の果たした歴史的意義であったと強調する。

第二章「戒律の近代――釈雲照における初期十善戒思想の展開」では、明治仏教界において「十善戒」が論じられたコンテキストを明らかにしつつ、宗門の枠組みで活動していた一八八〇年代の雲照の「安心論」と「仏教総合論」に注目し、そこに内在する戒律の役割を検討する。この頃から仏教者たちは、維新期に顕著だった国家に対する仏法庇護の要請から転じて、国民国家における仏教の有用性を積極的に主張しはじめる。そして明治初期から中期の仏教者たちが「戒」に寄せた主要な関心は、在家の立場を基軸に、戒律を真俗一貫の道徳として活かすことにあったという。雲照の十善戒論も、戒としての厳格さの喪失を代償としながらも、仏教道徳と国家を結びつける要諦として、さらに仏教者にとどまらないより一般的な行為規範として提示されていったことが明らかにされる。

第三章「在家と十善戒――明治中期における仏教実践の創出に着目して」では、「儀礼」や「勤行」など、より実践的なレベル（プラクティス）から雲照の十善戒論が検討される。著者が特に注意を促すのは、雲照が近代の仏教者として、戒律実践を「心」の働きなどの内面的領域と結びつけて語っていった事実である。それは「念仏」への対抗を意識しながら、「在家」を相手に説かれた実践だったが、そこでは内面的な心の領域と、身体的な実践の領域が複雑に重ね合わされていたのである。やがて雲照の戒律論は、〝十善戒こそが「念仏」に優る「易行」である〟との主張にまで先鋭化するが、そこでもやはり「心」や「信」という内面的領域が、戒律実践において不可欠な要素とみなされたことが確認される。

第四章「善悪を超えて――釈雲照と加藤弘之の「仏教因果説」論争と戒律実践」では、雲照の実践を支えた仏教的世界観が、近代の科学的世界観との出会いで動揺に直面したとき、彼がそれといかに対峙したのか考察する。二つの世界観の衝突が顕著に表れた例として、本章では時代を代表する啓蒙思想家・加藤が投じた論文「仏教に所謂善悪の因果応報は真理にあらず」（一八九五年）と、それが仏教界内外にもたらした波紋に注目する。そもそも、「三世因果善悪応報の真理」こそが仏教を通底する大原則だというのが、論争以前からの雲照の揺るがぬ信念で、加藤の所説は到底許容できない「邪見」であった。とはいえ、その立場を問われ始めた仏教者たちは、因果論の再構成を迫られていく。しかしそれは単線的な理性による解放の物語として片づけられるべきではなく、雲照らが善悪因果の原理について新たな語り方を求め、試行錯誤を重ねていった事実に著者は注目する。

第五章「正法と末法――釈雲照の戒律復興論とその条件」では、戦後の仏教研究で「忘却され」て久しい「正法」という言葉に注目しながら、具足戒を中心とする雲照の僧界刷新の語り

と、戒律復興の言説を考察する（傍点原文）。たとえば雲照の示した「僧園」（僧伽）の構想には、「末法」（無戒）に抗い、それを乗り越え「正法」復興を実現しようとする彼の理念が託されていた。そして雲照において「正法」という言説は、「国民道徳」や南方上座部仏教の国々、同時代における仏教の衰退や戦争など、様々な政治環境に合わせて多様に展開していく。著者によればその思想の根幹にあったのは、正法と戒律を一致させ、律僧を養成することこそが、混迷する「社会」に道徳的秩序をもたらし、ひいては国家に寄与できるという発想なのであった。

第六章「旧仏教の逆襲――明治後期における新仏教徒と雲照の交錯をめぐって」は、世紀転換期に展開した青年仏教徒らの「新仏教」運動と、雲照の「戒律復興」運動の衝突を考察する。新仏教徒もはじめは雲照を高く評価したが、いくつかの事件をきっかけに、やがて雲照バッシングへと発展する。彼らは雲照を「貴族的仏教」「迷信」を説く〝旧仏教の首魁〟とし、その戒律主義を極端な禁欲主義と批判した。対する雲照は、彼らが運動の中核に据えた「信仰」概念を批判し、信仰と理論を二つに分ける発想を西洋学問の風として反駁した。両者の交錯と対比を通して著者は、雲照の思想を「前近代性」のあらわれとして片づけるべきではないと強調する（それは従来の近代主義的研究態度の追認に行き着いてしまう）。むしろ両者は、旧来の仏教に弊風を認め、これとの断絶を志向する語り方を共有していたのであり、いずれも「仏教の近代」に対する回答と見るべきだと鋭く指摘する。

第七章「越境する持戒僧たち――釈雲照の朝鮮体験とその意義」は、近代日本仏教の「戒律」言説をめぐる「トランスナショナル・ヒストリー」の試みである。日本仏教の現状に深く失望した雲照は、一九〇六年、理想の仏教を求めて朝鮮半島へ渡る。半年にわたる滞在で現地僧侶と交流し、皇帝・高宗に仏教改良案を上申した。戒律主義を唱導する帝国日本の持戒僧たち（雲照と弟子の田中清純）は、朝鮮仏教をいかにまなざし、いかに自己を語ったのか。著者によれば、弟子の清純はまるで「新仏教徒」たちが雲照を批判したように、「形式」的な戒律を実践する「未開」の存在として朝鮮仏教を表象し批判した。対して雲照のまなざしには二面性があった。新仏教徒が勢力を増す日本仏教の改革のための協力者を朝鮮仏教に求める一方で、「大乗の弊風」に陥っている朝鮮仏教をみずから指導者として改良することに、雲照は「正法」実現の一縷の望みを託そうとしたと著者は指摘する。

第八章「近代日本における戒律と国民教育――日本主義・皇道論を視角として」では、「戒律」を応用しながら明治中期に「国民道徳」論を説いた雲照が、晩年に「国民教育」の課題に没頭した事実に注目する。まず、雲照は一面で当時の日本主義の潮流と対峙しつつも、国家主義と仏教を接続させていく。従来雲照については国家への「従属」の側面が強調されてきたが、

彼の態度は実は従属と抵抗の二元論の外側にあったと著者は指摘する。そして晩年の雲照が「儒・仏・神」の三道一貫からなる「皇道」を説いた事実も、単純な前近代への復古として片づけるべきではないという。むしろその営為は、「宗教」として布置された仏教を、「皇道」という政治・教法を超越した領域へと再配置する試みであったという。そして善悪因果という原理を国民教育論のアリーナで語ることによって、雲照はやはり戒律主義の立場を保持していったと著者は指摘する。

終章「成果と課題」では、従来「敗北した」といわれてきた戒律復興運動から近代宗教史の「逆照射」を試みた本書の立場から、まず研究史上の諸問題が再考される（傍点原文）。これまでの近代日本仏教史研究はビリーフ中心化の物語として語られ、あるいはビリーフとプラクティスのいわば単純な分離（分割）を論じてきたが、著者は両者が実際には入り組んだ関係にあったと指摘する。たとえば雲照の戒律論は「意識性の強い身体的実践」として、いわばビリーフとプラクティスの「重なり合い」のなかにあり、心身の両者はむしろ結びつきを強めていった。また著者は本書が、真宗を中心に描かれてきた直線的な仏教近代化論（真宗中心史観）に対するオルタナティブを提示していると説明する。そして最後に、「戒律の近代とは何であったか」という、著者の「究極的な課題」への回答を試みる。いわく、近代日本の戒律言説は、前近代との連続と断絶をともない、同時代の仏教者が直面した課題に応えながら、新仏教や科学思想などとの競合のなかで展開した。つまり、近代においても「戒律」は様々にかたちを変えながら存続したというのが、著者のひとつの結論である。そして雲照の運動は挫折したが、それはたしかに訴求力を得たのであり、その意味で彼らの試みは一つの日本仏教の「近代」を見事にあらわしていると著者は強調する。そのことは同時に、私たちが無自覚に受け入れてきた既存の「仏教」や「宗教」をめぐる理解の再考を迫るであろうことを示唆して、本書は閉じられる。

＊

以上、本書は「戒律の近代とは何であったか」という問いを掲げ、「近代日本宗教史上の諸問題」にも論及しながら、その回答を試みた書である。つまり、①近代日本における戒律の行方と、②近代日本宗教史上の諸問題、この二つの主題の考察から本書は構成されているといってよいだろう。

①について、戒律は近代以降の日本では「（国民）道徳」として語られていったというのが、著者の大きな見通しである。近代日本では仏教戒律はなし崩し的に失われていったという私たちの通念に対して、これは意外な結論といえるだろう。だが著者は雲照の思想と終始丹念に向き合い、その論理や変容過程を緻密に追うことで、この結論を導いている。雲照以外の律師はどうか、道徳論に変容した戒律をまだ戒律と呼べるのかなど異論もあり得るかもしれないが、評者としては、本書の描いた

近代日本の戒律像は、従来の通説を疑うに足るひとつの有力な知見を提示したものだと評価したい。

また本書は、同時代のコンテキストを適切に掘り起し、そのなかで雲照の戒律論や戒律実践がどのように位置づけられるか、とても丁寧に記述されている。このコンテキストへのこだわりは随所でみられるが、これは本書が依拠する言説分析の方法によるところが大きいのだろう。本書は雲照研究だが、必ずしも個人研究に終始しない広がりと説得性を有していることも、特筆しておきたい。

②の「近代日本宗教史上の諸問題」については、すでにみた「ビリーフ／プラクティス」論と「真宗中心史観」の二つの問い直しが、著者の中心的な問題関心である。戒律（論）研究の立場から、著者は真宗僧侶ではない雲照の戒律論に注目し、そしてその戒律実践がビリーフとプラクティスの（単純な分離ではなく）「重なり合い」のなかにあった事実を指摘することで、従来の学説に対する新たな知見を批判的に提示してみせる。「敗北」者として忘却・軽視されてきた仏教者たちに光を当て、そこから近代宗教史を「逆照射」しようとする本書は、著者も控えめに自負するように、これまで私たちの認識の外側にあったもう一つの「近代仏教」を語ろうとする試みとして、とても説得的だと思う。

一方で、①と②の議論が本書全体で相互にどのような関係にあるのか、評者には充分な理解が難しかった。あるいは、近代日本の戒律を問う本書の立場（①）を、宗教史学界で議論されてきた諸課題（②）に結びつけようとするのに、やや性急ではないかという印象をもった。学界の動向やトピックとの関係において自身の研究を位置づけ、その正当性を説明することは、学位論文としては正攻法だろう。本書はまさにその手本のような作品で、従来の学説を広く目配りしてその延長線上に自身の研究を適切に接続させようとする姿勢は、手堅く徹底している。

しかしそうした研究アプローチの方が前面に出てしまうと、議論の枠組み（外延）が、良くも悪くも学界の共通関心の枠内（②）に必要以上に限定されかねない。そうなると、斬新な発想にもとづく規格外の研究はなかなか現れにくいのではないか。これまで手探りで進められてきた「近代仏教」研究も、著者たち新しい世代の台頭とともに、いまや学問としての安定期を迎えようとしている。ただし分野として確立することと、議論がその分野内で完結してしまうことは、本来は別のことであるべきだろう。

とはいえ、自身の関心と学界の共通関心のバランスを、どのように上手くとるかは難しい。あるいは、そもそも両者が常に重なり合う（べき）ものなのかどうか、疑ってみることも必要だろう。だが本書が後者（②）の方に引っ張られがちという評者の見方が誤りでなければ、たとえばいま戒律を論じる意義についてのさらなる省察や説明が、著者には求められているのではないか。初めての単著である本書で、著者の専門研究者とし

ての力量は十分に示された。今後はその成果をさらに内破して、必ずしも学説史の枠内に還元されない著者ならではの「戒律の近代」研究が切り拓かれていくことを、同じ分野に学ぶ一読者として楽しみにしたい。

（東北大学GSICSフェロー）

福島栄寿著
『近代日本の国家と浄土真宗——戦争・ナショナリズム・ジェンダー』
（法藏館・二〇二三年）

佐々木　政文

本書の概要

本書は、著者の福島栄寿氏が二〇〇三年から二〇一九年までに発表した日本近代仏教史に関する諸論考を一書にまとめたものである（以下、本書評において単に「仏教史」といった場合には、全て日本近代仏教史を指すこととする）。

最初に、各章の概要を簡単に確認しておこう。

序章では、近代日本における国家と仏教との関係を解明することが本書の目的であることが述べられる。また、そのことを通して近代以降の学知の自明性を問い直す、という著者の基本的姿勢が示される。

第一章「〈近代仏教〉再考——日本近代仏教史研究と「鎌倉新仏教」論」では、明治期から昭和戦後期までの「新仏教」「旧仏教」論が紹介される。ここで前提にされているのは、今日の仏教史研究が依拠している〈近代仏教〉もしくは「日本近代仏教史」という認識の枠組みは、明治二〇年代以降に登場し